

C-80 肥満小児の体型にかんする一考察

九州女子大家政 ○和田幸枝 藤弘洋子

目的 近年肥満小児の増加傾向は、社会的問題としてフローズアップされ、その原因究明、対策に関心がよせられている。わけわけは、すでに肥満小児にかんする、栄養学的検討を加えてきたが、今回は、肥満小児の体型の特徴について観察をおこなったので、その結果について報告する。

方法 1) 肥満小児および対照児の体重と、身長、胸囲に対する示数値10項目を算出し、それらの標準偏差から \pm に変動係数を算出した。2) Mollisonの関係偏差折線を描き、年齢別による全平均値との体型の比較検討をおこなった。

結果 1) 体重による年齢的变化については、肥満小児は対照児に比べて、著しく大であり、加齢とともに男女差がみられなくなる。変動係数は、肥満小児、対照児ともかなり大きなバラツキがみられる。肥満小児と対照児間における差の検定の結果、いづれも1%の危険率で差が認められる。

2) 肥満小児と対照児の身体総合比較。8~12才(男女)の全平均値を基準線としてMollisonの関係偏差折線を描き、肥満小児体型の観察をおこなった。肥満小児体型の特徴としては、背丈もろせき、ほとんど正の方向に偏在している。長径項目は、対照児との差が小さく、周径項目では、男子は+10~+60の間に、女子は+10~+45の間に偏しており、とくに胸囲は、男女とも最も正の方向におり、一般的に対照児に比べて、胸囲の割りに首が小さく、腰囲が小さく、背肩幅の狭いわり、厚みのあるいわゆるすん胴体型である。